

〔特集〕

「働・学・研」協同論における博士づくり

— 「点」・「線」・「面」の視点をふまえて —

程 永 元

中国河南財經政法大学MBA学院

要 旨

十名教授の「働・学・研」(Work・Learn・Study 略称WLS)モデルは、独創的である。三位一体アプローチを通して、幅広い視野の下に専門性を深め、理論的かつ実践的に現代性を多角的に問い直す。まさに、21世紀モデルといえる。

十名教授のWLSモデルとは、いったい何か(What)。魅力的なところはどこか(Where)、なぜ(Why)、如何に展開するのか(How)。日本留学の7年間をふまえ、「働・学・研」協同のわが体験と思索を提示したい。

キーワード：「働・学・研」(WLS)モデル、WLS、三位一体、博士づくり

Developing doctors through learning and studying while working;

Based on the viewpoint of point, line and surface

CHENG YongYuan

MBA School
Henan University of Economics and Law

1 はじめに

筆者は、2011年3月に来日し、名古屋学院大学大学院の十名ゼミに入った。修士2年、博士5年の計7年間、濃厚で強烈な学術的雰囲気をも堪能する。修士・博士に関わる勉強・研究の知識・能力にとどまらず、多分野からのアプローチを通して、自己の人生や研究意識に磨きをかけ、WLSモデルに基づき博士論文に挑戦し仕上げることができた。2018年7月、博士号を授与された筆者は、同年9月に母国中国の大学に就職した。

本稿は、十名WLS融合論をふまえて、留学7年間の仕事・研究・生活についてまとめたものである。「働き・学び・研究する」という3分野の活動が、それぞれどのような意味を持ち、どのように融合していくか。自らの体験と思索をふまえて、提示する。

2 博士論文と感動の留学体験—「働・学・研」&「法制・行政・現場」の三位一体アプローチ

2.1 日本での労働体験が博士論文につながる

博士論文を書きあげるには、本人の粘り強い努力と研鑽が不可欠である。それを適切に方向付けていく指導、いわば研究指導の熟練技、も欠かせない。その両者が、どれだけ深く共鳴するかが、ポイントになる。

修士論文では、金融消費者問題、特にクレジットカード所有者の権益保護問題を研究した。その手応えをふまえ、一般消費者の権益保護に関する理論・政策研究をさらに発展させたい。そのような思いを抱き、2013年、博士後期課程に進学した。

WLSモデルを実践すべく日々の充実した生

活の中で、研究活動を進めていく。中日の友好と消費者主権の拡充を図るべく、品質管理や食品安全など創意性に富んだ研究へと進化させた。授業及び研究活動以外の時間を活用し、物流サービス業にアルバイトとして働いた。5年以上に及んだが、日本人の真面目な仕事ぶりに深い印象を受け、自らの業務体験をふまえて、日本の「食」を支え続けるシステムとりわけ低温物流システムの実態を研究した。

また、日本コンビニS社での2年間の労働体験をふまえ、小売業の実態を明らかにした。日本は食品安全を重視する国であり、「日本産」は食品安全の代名詞となっている。日本の食品は独創性、味のよさ、安定した品質、高い安全性などで国際的にも高い評価を得ている。

「なぜ、そこまでの？」といった疑問を持つ。食品安全から消費者安心に至るまで、日本の品質保証体系とはいったい何か、どうすればそれが可能になるのか。そういった問題意識・課題意識が、どんどん膨らんでいく。

2.2 食の安全・安心が博士論文の主題に昇華

中国における食の安全性をめぐる問題は、複雑かつ固有の性格と特徴がみられる。科学的・技術的な安全性の追求だけでは解消し得ない、「安全でも安心できない」という課題も浮かび上がる。そうした視点をふまえ、博論は、中国食品の安全・安心をめぐる現状を再認識し、中国にみられる深刻な実態に焦点を当てた。

そして、中国における食品不祥事の背後に潜む諸問題（食品汚染、食品生産管理・品質管理など）にメスを入れていく。中日数社の現場調査をふまえ、博士論文の眼目は、「中国における食の安全システムづくり」にした。食品チェーン構築の現状と完備に向けて、「法制・行政・現場の三位一体アプローチ」視点から深めてい

く。

2.3 博士論文を導いた「働・学・研」(WLS) 協同の理念とシステム

5年以上にわたるWLS(博士育成)モデルの
実践を通じて博士論文を仕上げ、2018年に学
位を授与された。成就の背景には、多くの方々
の支援がある。理論面(WLS)と実践面(十
名指導、学会発表、先輩たちの応援など)が相
互に補完する支援システムの恩恵にあずかった。
筆者の場合、日本語の対話力に問題があり、先
生の指導について十分に理解できなかった。4
年目から少しずつ動き出し、4年半で書き上げ
るも、校正指導には多大な時間が費やされた。
バラバラ気味の各章が体系化されていったの
は、5年目の秋のことである。最後まで粘り強
く的確な指導を貫かれる先生に深く共鳴するな
かで、博論を仕上げた。

十名先生(2018)によると、「程永元さんの
場合、文化の壁、言葉の壁が殊のほか厚かった
ため、博論指導の難しさは数倍になった。ギリ
ギリまで追い詰められたが、信頼と協働の力で
乗り越えることができた」とのこと。感慨無量
である。

博論への挑戦過程を振り返ると、ゼミの先輩
方の協力・応援に恵まれたとつくづく思う。本
当に感動・感激に伴う幸せな涙があふれ出てく
るのを、抑えきれなかった。「春の種まきが、
秋の収穫をもたらす」。金色の果実としての博
士号は、十名ゼミの知恵と個人努力の結晶であ
る。

「十年一本の剣を磨く、梅の花の香りは、厳
しい寒さの中に出てくる」。虹色の夢は、人の
魂に夢をつないでくれる至高の境地である。夢
を果たすために、人々は何も顧みず、さまざま
な困難を克服していく。自分の最初の夢を誠心

誠意に守り、進取し続けることができれば、最
後に成功と人生の価値を実現することができる。

3 WLS協同論における立体的人材育成シ ステム—十名ゼミの事例をふまえて

3.1 「働・学・研」協同の実践と思索

7年間の日本留学体験は、まさに「働きつつ
学び研究する」という活動そのものであった。
十名先生が提唱される「働・学・研」協同を意
識しつつ、その実践を通して、深め検証する過
程でもあった。思えば、「働・学・研」協同の
理念と魅力に惹かれ、そこに嵌り浸りきった7
年間であったといえる。

「働・学・研」協同とは何か。自分にとって
どのような意味を持つのか。そうした視点から、
「働・学・研」協同にアプローチしたい。

3.2 WLSとは何か

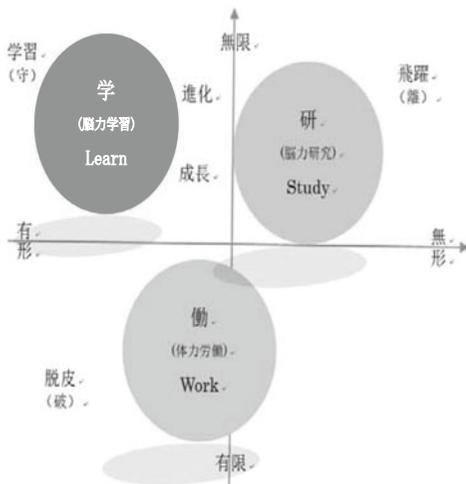
「働・学・研」協同とは何か、この新理念は、
十名直喜教授が定義した「働きつつ学び研究す
る」活動であり、Work, Learn, Studyの創造
的な融合である。

「働」において、博士をめざす留学生は、家
庭の経済的負担を軽減し、自分の大学生活を充
実すべく、いくつか社会の経験を蓄積する。独
立して生活する能力を養うために、基本的なラ
イフスキルの能力開発などを行う。

「学」において、博士留学生の学習はもはや
知識の伝承だけでなく、知識の開拓・革新へと
向かう。崇高な理想を持つだけでなく、深くて
堅固な専門知識も必要である。知識の更新が非
常に速い今日では、現在の知識だけを満足させ
るなら、逆流のように、いずれ社会から淘汰さ
れる可能性がある。

そこで、21世紀の博士留学生として、既存

図表1 WLSモデル



出所：十名直喜教授の「働・学・研」型モデルを基に筆者作成

の知識を問い直すとともに、アップデートを心がける。さらに、すべての人生の成長に役立つ新しい理念・見方・知識・方法を探求する。持続的な学習を通じて、知識の蓄積、能力の向上を実現させていくことができる。

「人生は有限であるが、知識は無限である」。博士留学生の生涯学習観も、そこに根ざしている。常に知識構造を更新できるなら、新しい知識に対して好奇心と鋭敏さを保つことができる。そして、活性化された知識の積み重ねによって形成されるのが、多くの良好な品質（個性、教養、風格、気質など）である。生涯学習とWLSの理念を打ち立て、新しい情報を吸収し、新しい知識を獲得し、新しい技術を運用する、新しい挑戦に適應する。

「研」において、博士留学生は、問題意識を研ぎ澄まし、既成概念や成果に挑戦していく姿勢が求められる。

①理論知識の強化

博士留学生として、論理的思考、立場が堅い、

自身の魅力の正しいガイドを保証できる。知識を探求しつつ、自分自身の知識システムを構築する。

②専門知識の強化

現代大学教育の形式変革・内容更新への認識深化に伴う、「革新精神、創造能力、持続可能な発展」という核心が博士留学生自身に厳しい要求を提出した。人生目標を実現し、博士留学生の素養と能力を高めることはとても重要である。

明日の需要に適應するために、今日はエネルギーを蓄え、能力を伸ばすべきである。積極的に勉強する習慣を身につけ、自分のために勉強の気持ちをつくり、学科の専門知識とシステムの教育理論知識を真剣に勉強し、総合的な科学文化の素質を持つ、多段階・多元化の知識の構造を掌握し、自分に科学、系統的に教育の内容をコントロールすることができる。

「働・学・研」モデルにおける新しい時代における留学生として、高いリーダーの魅力を備えているべきである。

3.3 「働」にみる留学生の生活・生存

「働」において在日留学生は、生存・生活の需要として周知である。日本では多くの大学生はアルバイトをしている。大学生の本業は学習であるが、社会に足を踏み入れる際に優れた社会人になるために、事前にトレーニングも必要である。その最も有効な方法がアルバイトと思われる。しかし、中国の大学で、アルバイトをしている大学生は日本より少ない。

中国人を含む外国人は、留学生及び家族が在留資格をもって日本に滞在する場合、地方入国管理局で資格外活動の許可があれば、原則として1週間あたり28時間まで就労することがで

きる。

経済面の弱さがある中国人留学生にとって、アルバイトができるという日本は、ほかの海外国家より魅力的である。

2011年、日本に留学したが、当初は日本の事情がまだよく分からなかった。それに、日本語の表現能力が足りないので、アルバイト先が限られていた。自分の条件によって、物流企業で体力労働の職種を選ぶしかなかった。給料が低く、労働時間は長い。この時期は、留学生の在日生存適応期と呼ばれる。

日々、日本企業のルールや文化やなどに慣れるにつれて、より上手に日本語で現場労働を行う素養、知識と能力を備えてくる。

筆者の場合、妻と2人の幼児と一緒に日本滞在し、夫婦共稼ぎで、育児をこなしながら、研究生活を進めた。人間生存の限界に挑戦するようなものであった。「日本語の会話力は劣り、文章力の水準も低くて、博論審査会での多岐にわたる諮問にまったく対応できない。貴君の数倍の能力を持つ者でも、不可能に近い」と、十名先生もため息をつかれていた。

この時期における純粋な喜びの1つは、労働をした後の休息であった。学習、研究にまで届かない。「労働・学習・研究」モデルの実践面は、バラバラにして滅茶苦茶であった。

授業＝学習という場当たりの受動的な学習姿勢が続いた。現状の改変ために、想像以上の努力・奮闘をしなければならない。

3.4 十名ゼミにおける学び

日本での留學生活を通して、アルバイトの意味・意義をだんだんと理解するようになる。アルバイトこそ、まさに実践面の学習である。日本に留学してから、4年以上の過酷な体力労働を経て、日本の社会に対する理解が深まり、日

本語の能力もだんだん高くなっていく。アルバイトが可能な範囲も広がっていった。他方、博士後期課程に入学してからは、学習面・研究面で茫然・困惑期に陥る。

授業＝学習という受動的な学習モデルは、限界に達していた。「学習」の意味を深く理解しないと、留學人生も終了の危険が迫っていたのである。「学習」とは、いったい何か、なぜ学ぶのか、如何に学ぶのか、真剣に考えなければならない。

今から考えると、「学びて思わざれば、すなわち暗く、思いて学ばざれば、すなわち危うし」(『論語』)の状態に陥っていたのである。十名ゼミでの各指摘・指導事項に対して、どう考え、どう判断し、どう博論に反映したか。議事録に沿って議論し、再確認を行いつつ、さらに深める作業が大切である。それは、「的確な判断・素早い行動」という研究者に必要な研究姿勢でもある。さらに、深く創造的に思考しつつ、本人と指導教授との深い共鳴作用のなかで、改善・進歩を日々積み上げ、成果を生み出していく。これは研究の王道である。

3.5 十名ゼミにおける研究

十名ゼミでの研究とは何か、如何に研究するのか。十名ゼミで、現役院生だけでなく、複数の博士OB、才能と意欲にあふれた多くの社会人研究者や他大学教員も参加している。参加者は、提出した問題に対する議論を通して、多角的な視点から学び捉え直す。

ゼミでは、社会人、研究者、先輩などと一緒に研究交流・切磋琢磨し合う。多様なテーマでの報告と議論が活発に行われ、各方面から見解・アドバイスを受けている。自分の不足点に気づき、他人の優秀なところを学んでいる。どうやってここから研究を進めていくか、どんな資料を

織り込むかなど。研究をさらに深めていく一番いい機会となり、論文の出発点に立ち返り、新たな展望を見出すなど、毎日がチャレンジになっている。

4 「点・線・面」にみるWLS融合の博士づくり

十名ゼミでは、点(自らの労働と学び)・線(先生の指導,先輩たちの協力など)・面(研究会,交流会など)の3領域が有機的に連携する。お互いにつながり合い、促進し合うなど、立体的人材育成システムが構築されている。

「点」においては、働きつつ学ぶ筆者は、皿洗いかから食品工場の生産ラインでの作業、物流企業の仕分けラインでの作業に至るまで、何でもやった。身をもって、日本のものづくり、サービス活動を日々実践してきた。もう1つの点は学習である。博士生の学習は、学部の勉強と同じように専門化の特徴を持っているだけでなく、さらに細分化し深い。学習や思考の抽象度も高い。

「線」においては、留学人生の7年間の足跡を回顧する際、さまざまな感情が緋い交ぜになる。多くの人に「線」で交じり合う。とりわけ、博士論文を仕上げることができたのも、ひとえに多くの方々のおかげである。もし、自分の論文に「知識増分」的な貢献があるなら、指導教官の十名教授に感謝しなければならない。留学人生の目標を実現し、さらなる人生の開拓などできたこと、心からの感謝を申し上げたい。

ゼミの先輩博士(庵原孝文,納富義宝,井手芳美など)とりわけ太田信義博士には、現場調査から公私に至るまで多々ご協力・教示いただいた。博論の本審査に向けて、日本M社を現場調査した際は、太田さんに大変なお世話に

なった。途中で四季の天気(雨,雪,虹など)を体験したが、安全に全うできたのも、太田さんのおかげである。

また、名古屋学院大学大学院事務室の方々にも、来日して不慣れな生活の中で、修士課程から7年間にわたりお世話になった。

「面」においては、博論発表会、懇親会、学会の地方部会などに参加し、最新の知識を得ることができた。日々の積み重ねの中に、新しいアイデアや視点などが見えてくる。天から降ってくるように感じたこともある。

「点はいずれ線となり、線はいずれ面となる」の考え方がある。点とは事象やアクションであり、事象である「点」が連携することで「線」になる。そして、特定の点が全て連携することにより最適化の「面」になっている。特定の点同士に繋がりがあがる面ができると1つの点に対するアクションが面に含まれる全ての点に波及し、さらにはアクションを起こした点まで波及することがあり、増幅して何倍もの効果(立体感)を生み出すこともある。

WLSの融合において、新しい点を見出し、新たな面を創る。さらに点・線・面が有機的な連携によって、創造的な研究が可能となる。博論もその1つに位置する。

そうした仕事と研究の創造的な場とサイクルを、中国において自らつくり出し、後進に道を指し示していかねばならない。

5 おわりに

「夢は学習から始まり、事業は実践から始まる」(習近平主席)。2011年、筆者は次のような目標を掲げて、日本に留学した。

「日中大学間の姉妹交流に微力を尽くし、可能性があれば、中国大学で教鞭をとり、次世代

の若者の成長や人材育成に骨を折る」。

博士号取得後は、中国大学の青年博士教師として、新たな課題に直面している。WLS融合モデルをより深めて、留学生版WLSモデルから中国大学教師版モデルへと昇華しなければならない。

しかし、中国では青年博士教師の成長問題に関する理論研究はまだ初歩段階であり、研究成果は少ない。そこで、WLS融合論のさらなる展開について、持続的研究を展開していきたい。

参考文献

- 1) 十名直喜 (2009)「働きつつ学ぶ現場研究のダ

イナミズムと秘訣」, 名古屋学院大学産業システム研究会。

主要業績

程永元 (2018)「食肉加工会社における食品安全生産の現状と課題—中国A社と日本M社の調査事例をふまえて—」『名古屋学院大学大学院 経済経営論集』第21号。

程永元 (2017)「食品安全をめぐる中国の現状と課題—生産現場・行政・法の三位一体アプローチ—」『名古屋学院大学大学院 経済経営論集』第20号。

程永元 (2015)「乳業における製造物責任の課題—消費安全への日中比較アプローチ—」『名古屋学院大学大学院 経済経営論集』第18号。